慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	S·M·リプセット、アルド·ソラリ共編『ラテン·アメリカにおける指導者層』
Sub Title	S.M. Lipset and Aldo Solari (eds.), Elites in latin America
Author	賀川, 俊彦(Kagawa, Toshihiko)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1968
Jtitle	法學研究 : 法律· 政治· 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.41, No.9 (1968. 9) ,p.122- 126
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19680915-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Seymour Martin Lipset and Aldo Solari (eds.), Elites in Latin America
Oxford University Press, New York, 1967, xii+531 pp.

S・M・リプセット、アルド・ソラリ共編『ラテン・アメリカにおける指導者層』

本書は、一九六五年六月、ウルグアイのモンテヴィデオ大学において「ラテン・アメリカにおける指導者層と発展」(Elites and Development in Latin America) のテーマのもとに開催されたセミナーの成果であり、これに参加したラテン・アメリカニストたちによる一五編の論稿をとり纏めたものである。このセミナーには、米国、ラテン・アメリカ諸国のみならず、ヨーロッパ諸国からも、政治、経済、社会各学界をはじめ、実業界、教育界のラテン・アメリカニストの参加が求められ開催されたものであつて、地域研究のあり方としてまことに理想的な研究推進の場であつたものと思われる。それは、とかく孤立化し易い各学界を連結してそれぞれが独断的帰結に陥ることを防止し、また価値観が異なる世界からの見方を交えて諸価値を再認識し、それらの均衡、あるいは是正を期待しうるがためである。

もつとも、こうした見地からの国際的セミナーは、これまでもしばしば行われてきたことであり、いまにしてとり立てて述べるほどのことではない。一九五九年、米国に設けられた「ラテン・アメリカ研究共同委員会」(Joint Committee on Latin American Studies) の企画になるジョン・J・ジョンソン (John J. Johnson) 編「ラテン・アメリカにおける連続と変革」(Continuity and Change in Latin America, Stanford University Press, 1964, xiii+282 pp.) は、国際的研究協力態勢によるラテン・アメリカ研究の著しい進展を印し、その将来を約束した。しかし、この研究は米国内のラテン・アメリカニストを中心としたものであつて、それは結局米国のラテン・アメリカ観の域を出るものではなかつた。その点、本書は一五編の論稿中一〇編までがラテン・アメリカ人政治・社会学者たちの執筆になるものであつて、国際的研究協力態勢下の地域研究の姿勢に大きな変化を印すものである。

主題とする「エリート」なる概念については、すでに多くの政治、社会学者たちによつて論じられ、またその分析にはさまざまな方法が講じられてきた。しかし、本書ではこれらさまざまな分析方法に包含されている概念とかイデオロギーの相違に拘泥することなく、社会的、経済的、政治的発展に必要な要素の一であり、近代化を推進する動力たるにふさわしい「指導者層」を浮彫りにし、ラテ

ン・アメリカ諸国の近代化におけるその役割を明らかにしようとするものである。すなわち指導者層が、それぞれ環境の異なる諸国の経済成長と政治的安定のために、いかに重要な役割を果すものであるか、その役割の諸機能と実際を解明することが本書の命題である。

内容はつぎの四部一五編から構成される。

I　経済発展と実業階級

1　「価値、教育、企業家」……S・M・リプセット

2　「新都市集団——中産階級」……ルイス・ラティノフ

「産業指導者層」……F・H・カルドソ

II　機能的指導者層

4　「政治的指導者層と政治的近代化——変動期における危機」……R・E・スコット

5　「軍部指導者層」……I・L・ハロヴィッツ

6　「教会指導者層——ローマ・カトリック教の変化と発展」……I・ヴァリエール

7　「文化的指導者層」……F・ボニーリャ

8　「労働指導者層」……H・A・ランズバーガー

9　「現代農民運動」……A・キハノ・オブレゴン

III　教育と指導者層の形成——大学

10　「大学と社会的発展」……D・リベイロ

11　「公・私立大学間の関係」……L・シェルツ・ガルシーア

12　「大学における政治的社会化」……K・N・ウォーカー

13　「大学生の知識傾向と政治理念」……G・A・ディリョン・ソアレス

IV　中等学校

14　「中等教育と指導者層の発展」……アルド・ソラリ

15　「教育と発展——中等教育者の見解」……A・ジョリー・グーヴェイア

右の豊富な内容について逐一紹介することは頁数の関係からしても到底不可能であるため、ここでは筆者の関心をそそった第四稿「政治的指導者層と政治的近代化——変動期における危機」について特に紹介しておきたい。

*

伝統的政治体制から近代的政治体制への過渡期にさいして、指導者層の演ずる役割はじつに重要である。指導者層の活動は、その政体が国民統合と政治的近代化に向つて変動する速度とその効果のほどを決定する。このような前提のもとに先進諸国と開発途上国とにおける政治的近代化の過程を比較検討してみると、今日、蓄積された科学と技術の驚異的な進歩のゆえに政治変革の歩調はきわめて早められ、また変革上の実利的目的は大部分その性質そのものが変えられていることが知れる。したがつて、指導者層のその過程における態度と活動にも、先進諸国と開発途上国との場合では大きな相違が見出される。

先進諸国においては、政治的指導者層は有能で機敏な政治的意図

を抱く伝統的支配階級、あるいは移行する新興階級の中から現われ、変動期を経た今日では行政・技術的問題を基本的政策事項と切離して、いわばパート・タイムの政治的指導者層と化した。これに対して、非近代的国家にあつては、伝統的指導者層は政治の舞台から完全に引込んでおりながら、かれらの組織体の効力の改善につねに専念し、たとえそれが間接的なものであれ、かれらは国の政策決定過程にできる限りの圧力を加えることができるように備えている。

ラテン・アメリカにおける大部分の諸国では、政治変革は激しい速度のもとに行われ、政治的指導者層はヨーロッパ人理論学者の見るところとはまったく異なる役割を演じている。各機能的指導者層は、政治的指導者層として居坐つている。にもかかわらず、基本的政策決定を任しうる「フル・タイム」の専門的職業政治家がいる国は一つもない。ラテン・アメリカでのいわゆる「ポリティコス」(politicos＝政治家)は、その公的役割が示すほど国の政治体制内部に影響力をもつていない。また、変動期にあつては政党、あるいは政治運動とても意志のばらばらな指導者層の間に立つて、中立的、もしくは調停仲介的役割を果すことができない。それゆえ、ラテン・アメリカにおける主要な政治的指導権は政治過程に直接働きかける各職能指導者層に握られることになる。ここに、職能指導者層についてはもちろん、かれらが指導権を握る政治機構についても究明することの重要性が存在するわけである。

さて、ラテン・アメリカにおける指導者層、特に伝統的指導者層の演ずる役割をみるに、それは国の政治体制の必要を満してはいない。大地主、軍部、ならびに教会の三者はそれぞれ政治機能を分担し、また政治過程に参与する者について同意するなど、真に権力指導者層(パワー・エリート)としての実力を保持していた。今日なおこのような伝統的指導者層によつて牛耳られている国としては、ホンデュラス、パラグアイ、エクアドル、ドミニカ共和国、ニカラグア、コロンビアなどが挙げられるが、その他の諸国でもこれに類する伝統的価値体系はいろいろな型によつて支えられている。だが、近代化の力は強力な伝統的文化の鎖を打壊し、この権力指導者層による寡頭政治体制の持続を困難ならしめている。社会的経済的発展は、伝統的な三指導者層それぞれの政治的役割について三者間に見解の不一致を生じさせ、伝統的指導者層の内分裂をもたらした。

しかし、伝統的指導者層の政治的指導力は、かつてのように三者連帯による附帯的な力を失つたとはいえ、かれらは新たな姿勢をもつて新たな政治的役割を分担している。「アセンダドス」(hacendados＝大荘園主)はその所有する広大な土地を利して労働問題、社会政策、農産物・生産財の輸出入税、金融、農地改革などの諸問題について大きな発言力をもつている。教会の政治活動は、信者の信仰心を利して制度的普遍性や包括性を強要し、社会的世俗的秩序を支配しようとした時代からすれば大転換というべく、教権教職組織よりも自発性に根ざす信徒的共同体として、「カトリック政党」の「下」からの組織化による新たな運動形態をとつている。また、軍部のプロフェショナリズムは、一時的にその政治的発言力を弱めはした

が、最近では近代兵器による再武装を背景として軍部は再び政治の表面に躍り出ている。

このように、伝統的指導者層は近代化の諸条件に応じて新たな態勢を整えてきたが、一方、新たな職能指導者層の抬頭についてもこれを見逃すものではない。中産階級指導者層、特に商工業、知識階級、教員、労働者、農民など、組合を通じての政治活動は近年にいたりますます顕著なものがある。だが、これら中産階級指導者層の政治的発言力は、伝統的指導者層に比してきわめて弱く、国の政治体制に真向から挑戦するほどの能力をもつものではない。その政治的役割は、せいぜい、選挙にさいしてそれぞれの利害関係に従って動揺する潜在的圧力団体としてのものにすぎないとみられている。しかし、これらの利害関係を調整し、中産階級と伝統的指導者階級とを結合し統合しようとする政党の動きに対し、今後の注目が払われねばならない。

しかしながら、職能指導者層が政治的指導者層としてとどまり、しかもそれらが分離したままで動かず、したがつてラテン・アメリカの政治機構がその統合的機能を効果的に動かすことができない現状にあつては、この問題を解決する唯一の救済策は人々の価値体系を変更すること以外にはないということになる。もし、指導者層も、それに追随する者も、ともに近代化されうるならば、現存する政治的統合機構――政党、政党制、立法部、大統領など――はかれらを変革に合わせて調整し、そこに新たな政治体系を作り出すこともまた可能となる。確かに、近代化の動き、あるいは民主政治の動きは、政治指導者層の政治過程に対する態度の変化を期待する。変化に対して敏感に対応しうる政治指導者層の出現、そこにラテン・アメリカの不安定な政治的現況を打開する道がある。

スコット教授の論旨は概ね以上のとおりであるが、この論稿ではメキシコにその実例の多くをとり、緻密な理論が展開されている。このことは、同教授がメキシコがラテン・アメリカにおける近代化の先駆国であることにいち早く着目され、先に多年にわたる労苦の結実として出版された「変動期におけるメキシコの政治」(R.E. Scott, Mexican Government in Transition, Univ. of Illinois Press, Urbana, 1959, 345 pp.) の著者であつてこそ、はじめて立論しうるものであろう。

*

全体的に本書は、ラテン・アメリカにおける各界指導者層を分析的に究明し、それがこの地域的発展にいかなる影響を与えているか、地域的発展のためには指導者層がいかにあらねばならぬかという観点から検討が進められた。結局、本書の重点が教育制度と指導者層の形成との結びつき、大学、中等教育などの教育問題におかれたことは、そこにラテン・アメリカの発展的将来を見出すことができるとの共同研究の結論的傾向を明らかにしている。

ラテン・アメリカについて、かかるテーマのもとに政治学者ならびに社会学者によつて行われた共同研究としては最初の試みであり、じつさい地域研究の画期的な業績として高く評価されて然るべ

きであろう。

（賀川　俊彦）

Gabriel A. Almond and G. Bingham Powell, Jr., *Comparative Politics*
——*A Developmental Approach*
The Little, Brown Series in Comparative Politics
Little, Brown And Company (INC.), Boston, 1966, xv＋348 pp.

アーモンド、パウエル共著『比較政治学——発展的アプローチ』

広い意味での体系分析の方法は、社会科学の理論化のための魅力的なアプローチとして、広く認められるに至つている。ソ連社会学に関する訳業によるとソ連においてすら「系としての対象を分析するアプローチは二〇世紀中期の科学的特質の一つに数えられ」ており、とくにサイバネティックスの発展は、経済学や社会学、生物学、物理学における言語外的存在に対する体系分析や、あるいは数学や論理学における言語的体系分析の方法に、新しい考えをもちこむものとして高く評価され、「現在における他の多くの学科と同様に、マルクス社会学においても……体系分析の任務が提起されている」（ヴェ・エヌ・サドフスキー「系をなす対象物の研究の方法論的諸問題」田中清助訳、ゲ・ヴェ・オシーポフ編「ソヴェト社会学」第一分冊所収、青木書店、昭和四二年）ほどである。

ところで体系分析の方法を社会科学の分野にもちこもうとする場合、ただちに生じる方法論上の問題の一つは、系として把握しようとする対象の規模と錯綜性の問題である。政治学が対象とするのは直接にコミュニケーションの交換ができる対面的集団に対応する系のみではない。むしろ、その主役となるのは中間的媒介機構の介在によつて、間接的なコミュニケーションの交換を常態とする不特定多数の人間間の複雑な系にある。しかも、少くとも事実上国家に強く研究焦点をあてきたつた政治学にとつて、かかる二次的コミュニケーション体系の極限としての国家あるいは政治的全体社会を一つの系として把握しようとする理論は、よしそれが理論としてなりたつための検証可能性や操作的把握において超えがたい障害が予想されるとしても、なお捨てがたい魅力を政治学者に与えるのである。

まことに政治学者にとつて「基礎的理論（あるいは思弁）の方が確認された特殊理論よりはるかに先走つてしまつて、明らかに相互に関連のない諸理論を統合するものでなく、どちらかといえば依然として実現されることのないプログラムになつている」（Robert K. Merton, *Social Theory and Social Structure*, 1957. 森東吾、森好夫、金沢実、中島竜太郎共訳「社会理論と社会構造」みすず書房、昭和三六年）としても、なお一般理論の魅力には抗し難いのである。いわゆるパ